でも、やっとはい出した子ガメたちなのに、浜ではカラスやのら犬に食べられたり、海の中では大きな魚にくわれたりします。だから、おとなのカメになるのは卵五千個のうちの一個ぐらいと言われています。親になって浜へ帰ってくるまでに、人間が捨てたビニルを食べて死ぬカメもいます。わたしはとてもかわいそうだなと思います。そして、精いっぱい守ってあげたい気持ちがわいてきます。

子ガメが海に帰るときは、みんなで、

「大きくなって蒲生田の浜に帰ってきてな。」

「浜、きれいにして待っとるけんなあ。」

と、声をかけながら見送ります。

（徳島新聞社 提供）

6 ある秋の日のできごと

ある秋の日の夕方、ぼくは、親友の太郎君の家の手伝いをした。畑の白菜や大根の葉が虫にくわれないように、消毒用の農薬を散布（さんぷ）するのである。

太郎君の父は交通事故でなくなり、家には年老いたおばあさんと、四年生の妹と、まだ学校に上がらない弟がいた。それで長男である太郎君は、父のかわりになって働かなければならなかった。かれは、学校でも、もくもくとよく働いた。

はじめは、太郎君のお母さんもいっしょだったが、とちゅうで、

「用事を思い出したので先に帰ります。明日もやるからおそくならないうちにやめるように。」

と言って、家にもどられた。たそがれ近かったが、空はまだ明るかった。なれない仕事であったが、めずらしさもあって楽しかった。

シューと音を立て白くきりのように散る農薬に夕日があたり、やわらかい大根の葉の上に美しいにじの輪ができた。そろそろ父のばんしゃくの酒を買いに行かなければならない時こくでもある。だが、太郎君の顔を見ると、なんとなく言いそびれ、そのまま仕事を続けた。

秋の日は、つるべ落としにしずむ。

やがて仕事がすみ、ふと自分にかえったときは、足もとだけを残して、あたりはすっかり暗くなっていた。後かたづけもそこそこに、太郎君の家を出ると、かばんを小わきにかかえ、一キロメートルの村道をいっしんに走った。

家のしきいをまたいだとたん、

「いままで、どこで遊んでいたんだ。」

父の大きな声がとんできた。父のおそろしいけんまくにおされて、何か言おうとしたが、声にならなかった。

「勉強が終わっても、家に帰らず遊んでいるようなやつは家の者ではない。家に帰るのがいやならどこへでも出て行け。」

ふだんからしつけのきびしい父である。いつのまにか、祖母もぼくのそばに来て、おろおろと立っていた。

「さ、早くあやまりなさい。正直にわけを話してごらん。どんなことがあっても、うそをついてはいけないよ。おばあさんがいっしょにわびてあげる。」

父の言葉も、祖母の言葉も、ぼくにとっては意外であった。店（理髪店）にはふだんより大勢の客が来ていた。たくさんの人の視線を感じたぼくは、その場にいたたまれず、

「ぼくは、何も悪いことをしてきたんじゃないんだ。」

と、はきだすように言うと、かばんをそこにほうり出し、家をとび出してしまった。

「信一、信一。」

と、後から祖母の呼ぶ声が聞こえたが、ぼくは野道をいっしんに走り続けた。祖母の声が遠のき、後から追ってくる気配がないと気づくと、急に悲しみがこみあげ、なみだがあふれてきた。土手にこしを降し、いま、自分が走って来た道や、となり町の電灯のあかりをながめていると、しだいに家がこいしくなり、帰りたくなった。

——父はなぜあんなに、わけも聞かずにしかったのだろうか。

——自分の今日したことは、いけないことだったのだろうか。

——父が自分をしかったのは、ぼくがにくいからだろうか。

——いや、ちがう。

——とすれば、父がしかったのはなぜだろう。

——友だちの家の手伝いをして、おそくなったのだ。それでもいけないのだろうか。

——いや、悪いことではない。父は短気なのだ。しかし、ふだんはやさしい、

いい父なのだが。

歩きながらぼくはいろいろ考えた。祖母は家の門に立っていた。ぼくの姿を見ると走り寄って、

「さあ、話はあとでいい。家にお入り。姉さんや兄さんたちも心配している。夕ご飯にしよう。ふろにはいって、今夜は早く休むがいい。」

と、ぼくをいたわってくれた。

祖母や姉、兄たちにはご飯を食べながら、帰宅のおそくなったわけを話した。祖母は安心したようにぼくの話を聞いていたが、

「お父さんは、お前がにくくてしかったのではない。心配していたんだ。どうしてあんなにおこったか、信一は信一なりによく考えなければいけないよ。」

と言った。

次の日、だれから話を聞かれたか、担任の米倉先生がわざわざ家に来てくださった。父と笑いながら話をされていたが、帰りぎわに、

「きのうはごくろうさん。太郎君の家でも、たいへん助かったと喜んでおられた。お父さんには、わたしからもよくお話ししておきました。また、君に何か仕事をお願いするかもしれませんよ。今度は、お父さんにしかられないようにしようね。」とおっしゃって、学校のほうへもどっていかれた。

先生にまで心配をかけたのかと思うと、ぼくは、ふたたび反省させられたのである。

7 祖国の危難を救う

一八六四年(元治元年)二月の霧の深い朝、イギリスの首都ロンドンのガワー街の下宿で、ぐっすりねむっていた伊藤俊輔は、井上聞多にたたき起こされた。

「おい、伊藤、起きろ。日本でたいへんなことが起こっているぞ。戦争が始まるかもしれないぞ。」

井上がさしだす新聞をみると、長州藩が下関海峡で外国船を砲撃したということが書いてある。

「これはどえらいことになった。わが長州も日本もふっ飛んでしまうぞ。」

二人は、思わずさけんだ。さわぎを聞きつけて、同宿の三人の仲間も部屋へ集まってきた。山尾庸三、野村弥吉、遠藤謹介である。この五人は、西洋文明を学ぶために長州から派遣された留学生である。

7　ある秋の日のできごと

1―(1)　生活を振り返り，節度を守り節制に心掛ける。（思慮・反省，節度・節制）

1 主題設定の理由

〈ねらいとする価値について〉

どんな時でもきまりを守って，節度ある生活をしなければならないということはわかっていても，つい深く考えず，自分中心の判断で行動したり，また，友達の誘惑に負けたりして人に心配や迷惑をかける場合が多い。

社会生活を円滑にするためには，無制限な欲望や一時的な衝動を自己規制することが大切である。そのためには，事に当たり熟慮することと，次の行為に生かすための反省をすること，つまり，思慮と反省の繰り返しが生活向上には不可欠である。

〈子どもの実態について〉

最高学年として学校生活のあらゆる場で中心となって活動することが多いことから，自己中心的な態度や自分の意見ばかりを主張する姿も少なくなった。また，よく考えて行動しようとする子どももみられるようになってきた。

しかし，家庭生活においては，自己中心的な言動もみられる。自己内省させることにより，節度を守るべき点を自覚させていきたい。

〈資料について〉

主人公の信一は，親友の家が困っていることを知って「手伝い」という行為に出たのである。このことは，社会的に価値を持つものであり，信一自身も自覚していることである。「ぼくは何も悪いことをしてきたんじゃない。」という言葉からも察することができる。また，父も担任の先生も手伝いがよいことであることは常々話していることである。

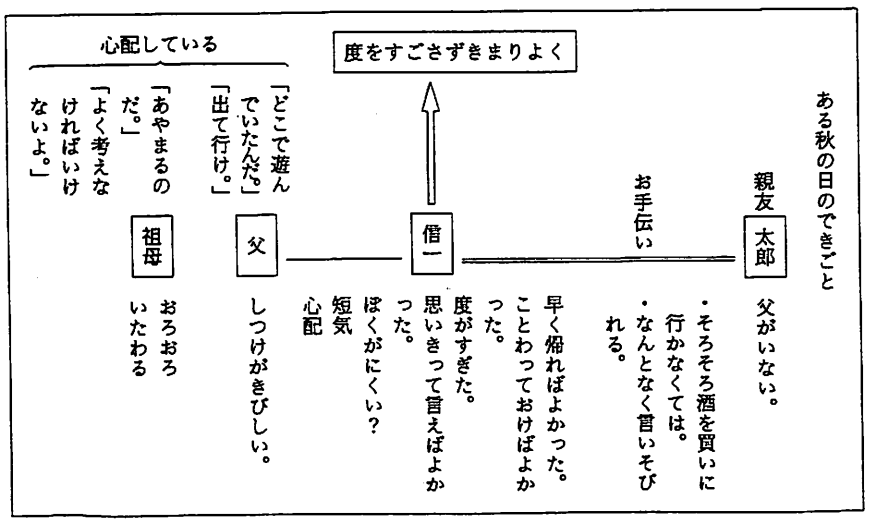
父が叱った心の中には，信一の性格を考え，また普段の生活から，行為の目的そのものでなく，それをしたことで，他の約束事がすべて許されると考える信一の考えの誤りに気付かせたいという深い親の愛があることが考えられる。

祖母のやさしさに自己を見つめ反省する主人公を通して，節度を守ることの大切さをとらえさせることができる。

2 ねらい

自分ひとりよがりの判断でなく，節度をもって思慮ある生活をしようとする態度を養う。

□板書



3 展開

学　習　活　動	支援上の留意点
(1)　今までに自分の行動や性格について反省した経験を発表する。 ○　あんなことはするのではなかったと反省することはありませんか。	・　ねらいとする価値にかかわる意識がもてるようにする。
(2)「ある秋の日のできごと」を読んで，信一について考える。 ①　父に大声で叱られた時，信一はどんなことを考えたのでしょう。 ・父はわけも聞かずに叱ったので腹がたった。 ・おそくなった理由を話そうとしたのに，遊んでいたときめつけておこるなんてひどい。 ・自分が良い事をしてきたのに，叱られるなんておかしい。	・　父のおそろしいけんまくにおされて，何か言おうとしたが声にならず家をとび出した信一の納得のいかない気持ちに共感できるようにする。
②　暗い土手にすわりこんだ信一は，どんなことを考えたでしょう。 ・父はどうして，あんな大声で叱ったのだろうか。 ・ぼくがしたことは，悪いことだろうか。 ・父は，ふだんやさしいのに，何があんなに父を怒らせたのだろうか。 ・友達の家の手伝いは良い事なのに，その理由も聞いてくれないのはおかしい。	・　父に叱られたことを悔しいと思いながらも，何であんなに叱ったかと疑問を持つところに反省の素地があることをとらえることができるようにする。
③　父がひどくしかったのは，どんな気持ちからでしょう。 ・信一の帰りがあまりにもおそかったから。 ・なかなか帰ってこず心配のあまり大声を出したのだろう。	・　心配のあまり叱るという態度に出た父から，信一が普段信用されていることに気付くことができるよう助言する。
④　気持ちが落ちついてきた信一は，家へ帰る時，どんな気持ちになっていたでしょう。 ・いくら良い事をしても，家族に心配をかけるまでするのは度が過ぎているのだ。 ・父やみんなが心配してくれているのだ。早く帰ればよかった。 ・おそくなった理由を，勇気を出して正直に父に話そう。	・　理由はどうであれ，おそくなったことはよくないことであることに気付いた信一の気持ちを理解することができるようにする。
(3)　自分たちの生活を反省する。 ○　けじめのある生活をどのように送ってきましたか。 ・休みの日になると，だらだら過ごしてしまうので，日課表をつくってがんばってみた。 ・むだづかいをしないように，こづかいちょうを作っている。	・　さまざまな経験を発表し合うことを通し，利己的な判断で節度を失うことがないように助言する。
(4)　教師の話を聞く。 ○　度を過ごさないで，よく考えて行動することは，わたしたちにとって，どんなに大切なことなのでしょう。	・　実践への意欲を高めることができるようにする。